言語文化教育研究学会　第 34 回月例会

言語文化教育研究学会
Association for Language and Cultural Education

インタビューにおける「語り」から見えた聴き手と語り手の関係性の変容
−かつての日本人が語った「わたしの母国語」の意味の探求を手がかりに−

発題者：佐藤貴仁

今回の月例会では、かつての日本人*であった一人の女性への縦断的インタビューをもとに、その「語り」および、インタビュー活動における聴き手と語り手の関係性の変容について、考察したものを発表します。

語り手の呉さん（仮名）は日本統治下の台湾で生まれ育った台湾人で、18 歳で終戦を迎えました。その後の日本撤退による社会の転換に伴い、国籍ならびに、社会における使用言語が日本語から中国語に変更を余儀なくされた経験を持っています。この言語置換により、日本語が自由に使えなくなった状況が、のちの呉さんの人生にどのような影響を及ぼしたのかを探るべく、計 4 回のインタビューを行いました。その分析では、インタビューにおいて呉さんが繰り返し口にした「（日本語は）わたしの母国語」ということばの意味を主眼に探った結果、彼女にとっての「母国語」とは、それを失うことが、社会からの断絶を意味するものであり、同時に人生を支えるものでもあったことが分かりました。つまり、呉さんにとっての「母国語」は単なる意思疎通の道具ではなく、彼女の人格やアイデンティティをも包含していることが示唆されたのです。

このような結論が導き出された背景として、インタビューにおける「語り」の質が、回を重ねるごとに変化していったことが挙げられます。なぜなら、2 回目以降のインタビューから、呉さんの言う「母国語」の意味が、単にコミュニケーションツールとしての言語という意味ではなく、彼女自身から切り離して考えられない不可分なものとして、解釈できる語りが出現したからです。では、実際それはどのような変化だったのでしょうか。

2 回目以降のスクリプトを概観してみると、聴き手である私と、語り手である呉さんとの、互いの語りが交差し、2 人の関係性が変容していった過程が見られました。一例を挙げると、1 回目では一問一答のような形式的なインタビューだったものが、3 回目では呉さんの話を遮って、聴き手である私が伝えたいことを語っている場面が見られます。それは、一方が聴きたいことを聴き、もう一方が聴かれたことに答えるという、いわゆるインタビューの域を超えた行為だと捉えることができます。相手の語りを受け止め、肯定するだけではなく、語りからさらに触発され、互いが主体的に聴き、語ることで、新たな関係性が生まれ、さらに、そうした関係性が生まれることで、より深い語りが出現したのではないでしょうか。つまり、インタビューとは単に聴き手が聴き、語り手が答えることではないと言えるでしょう。

月例会では、呉さんが繰り返し口にした「母国語」の意味に加え、「インタビューとは何か？」ということについて、具体例をもとに皆さんと一緒に考えたいと思っています。

* 日本統治時代の台湾で、台湾教育令（1919 年）発令以降の日本教育を受けた台湾人を指す

日時：7 月 31 日（金）18:00～19:40
場所：早稲田大学　早稲田キャンパス　22 号館 601 教室
参加費：無料　予約：不要
当日、直接会場にお越しください
問い合わせ：monthly@alce.jp